

特別養護老人ホーム『ミネルヴァあべの』

中長期経営計画の概要

(2019年度～2024年度)

『ミネルヴァあべの』が目指す姿 (Vision)

～ “マイホーム” & “ハッピーライフ” ～

(My Home & Happy Life)

ご利用者お一人おひとりにとっての暮らしの場であることはもちろん、
自分らしくいきいきとした生涯を送っていただけるように支援体制を構築する

喜びあふれる“わたし”の住まい

ケアポリシー

「ユニットケア」と「5つの喜び」

地域連携

サービスの
質の向上

家族連携

健全経営

人財育成

『ミネルヴァあべの』を取り巻く環境

内部環境

- ▶法人としての長い歴史と幅広い分野にわたる事業展開
- ▶スタッフの不足による、ご利用者の受け入れ制限
- ▶高齢者分野への新規参入に係る専門性の未熟さ
- ▶大阪の大動脈「あびこ筋」に立地する利便性

外部環境

- ▶地域の高齢化（阿倍野区：25.47%【令和元年8月現在】）
- ▶介護・福祉人材の不足、労働人口の減少と一般企業とのイメージ格差
- ▶介護度による入居制限及び加算基準等
- ▶最低賃金の上昇、社会保障費の抑制など、施設報酬の実質的低下
- ▶多様な事業体の参入、他の特養や有料老人ホーム、サ高住等の増加

目指す姿を実現するための基本戦略

ご利用者のHappiness(喜びと幸せ)と我々のビジョン(目指す姿)の実現に向け、『ミネルヴァあべの』を取り巻く諸々の環境に対応しながら課題の解決と形成に取り組んでいくために以下の項目を基本戦略の骨子とする。

- ・介護ケアサービスの充実
- ・専門性の高いケアの提供
- ・力量を高め、深める人財育成
- ・適正かつ安定した経営基盤の確保
- ・地域福祉の推進と地域との連携強化
- ・情報収集や情報発信を活用した事業戦略

【重点課題と取り組み事項】

1. 介護ケアサービスの充実

(1) ユニットケアの推進

- ・ユニットケアの理念の浸透
- ・ユニットケア推進委員会による定期的な研修

(2) 利用者の自律的な生活の実現

- ・これまでの生活とニーズアセスメントに基づくケアプランの作成
- ・24時間シートの活用による自分らしい暮らしの保障
- ・“5つの喜び”を生むサービスの提供

(3) サービス内容の標準化

- ・各種マニュアルの整備と定期的な見直し
- ・ケアの統一化

(4) 安全かつ専門的な技術の提供

- ・科学的介護の実践
 - ①4つの基本ケアの推奨と実践
 - ②5つのゼロと4つの自律支援に取り組む
- ・アウトカム(成果・効果)を重視したケアの実施

【重点課題と取り組み事項】

2. 専門性の高いケアの提供

(1) 認知症ケアの質の向上

- ・認知症ケア担当スタッフの配置とスキルアップ
- ・精神科医との連携
- ・認知症ケア教育訓練方針・計画の作成
- ・認知症介護基礎及び実践者研修の受講(基礎研修8名、実践者研修4名)

(2) 医療ケアの充実

- ・看取りケアの実施
- ・介護職員による喀痰吸引実施体制の強化
「喀痰吸引等研修」の受講(12名配置)

(3) 機能訓練の充実

- ・効果的な機能訓練を実施するための環境整備
- ・多職種協働による取り組みとしての意識の醸成

(4) 栄養ケアマネジメントの充実

- ・全ての利用者の栄養状態の維持・改善
- ・利用者の状態に応じた食事形態での提供

【重点課題と取り組み事項】

3. 力量を高め、深める人財育成

- (1) スタッフが誇りとやりがいを感じる職場づくり
 - ・「経営理念(法人理念や施設方針)」の浸透
 - ・「ユニットリーダー研修」の受講(全ユニットリーダー)
 - ・「ユニットリーダー研修実施施設」への応募及び認定
 - ・「TENAマイスター」認定の取得(介護職員の6割)

- (2) 専門的スキルの醸成
 - ・本人中心主義(パーソンセンタード)の追求
 - ・福祉レクリエーションの充実

- (3) 各種委員会活動の発展
 - ・各種委員会主催の研修の実施
 - ・実践発表等の外部発信と連携

- (4) 働く人が成長できる組織づくり
 - ・人事考課制度と目標管理制度の活用
 - ・施設内外研修の充実
 - ・介護の知識と技術の評価

【重点課題と取り組み事項】

4. 適正かつ安定した経営基盤の確保

- (1) 法人理念や施設方針、経営目標を明確にした健全経営の徹底
 - ・法人の理念・施設経営方針の周知
 - ・全職員への職員手帳の配布と定期的な振り返り

- (2) 人材確保・定着に向けた取り組み
 - ・パートナー制度手順書の作成と実施
 - ・働きやすい職場環境づくり
 - ・全職員を対象とした面談の定例化
 - ・心身の健康増進への取り組み
 - ・自立支援の促進とスタッフの介護負担の軽減～介護機器・ロボットの活用～

- (3) リスクマネジメント・危機管理体制の強化
 - ・外部侵入者に対する防犯体制の強化
 - ・外部侵入者等防止ガイドラインの作成

- (4) 事業が持続可能となる安定した財源の確保
 - ・収益目標の具体的な設定
 - ・業務分析による固定費削減目標の設定
 - ・将来の新規事業のための財源確保
 - ・採用・人材開発への積極的な投資

- (5) 共生型サービスの実施 ～高齢者も障がいのある方も共に利用できるサービスを～

【重点課題と取り組み事項】

5. 地域福祉の推進と地域との連携強化

(1) ボランティア受け入れの促進

- ・ボランティア受け入れガイドラインの作成
- ・ボランティアが活躍できる活動等の抽出
- ・当施設で活躍するボランティア情報誌の発行

(2) 地域貢献の促進

- ・阿倍野区及び近隣区域における福祉ニーズの調査
- ・地域交流情報誌の発行(ボランティア情報誌と一体)
- ・社会福祉法人による利用者負担軽減等制度の活用
- ・緊急対応・一時保護ケースの積極的な受け入れ
- ・地域における介護予防教室等の開催

(3) 実習生の受け入れ促進

- ・実習生指導者講習会への計画的受講派遣(4名配置)
- ・実習生受け入れマニュアルの作成

(4) 防災拠点としての機能の充実

- ・町内会開催の防災訓練への参加
- ・福祉避難所としての要援護者受け入れ対応マニュアルの作成
- ・阿倍野区避難所連絡会議への参加・連携

【重点課題と取り組み事項】

5. 地域福祉の推進と地域との連携強化

(6) 共生型サービスの実施 ～高齢者も障がいのある方も共に利用できるサービスを～

6. 情報収集や情報発信を活用した事業戦略

(1) 施設広報誌の発行

(2) 専門機関・団体等からの情報収集

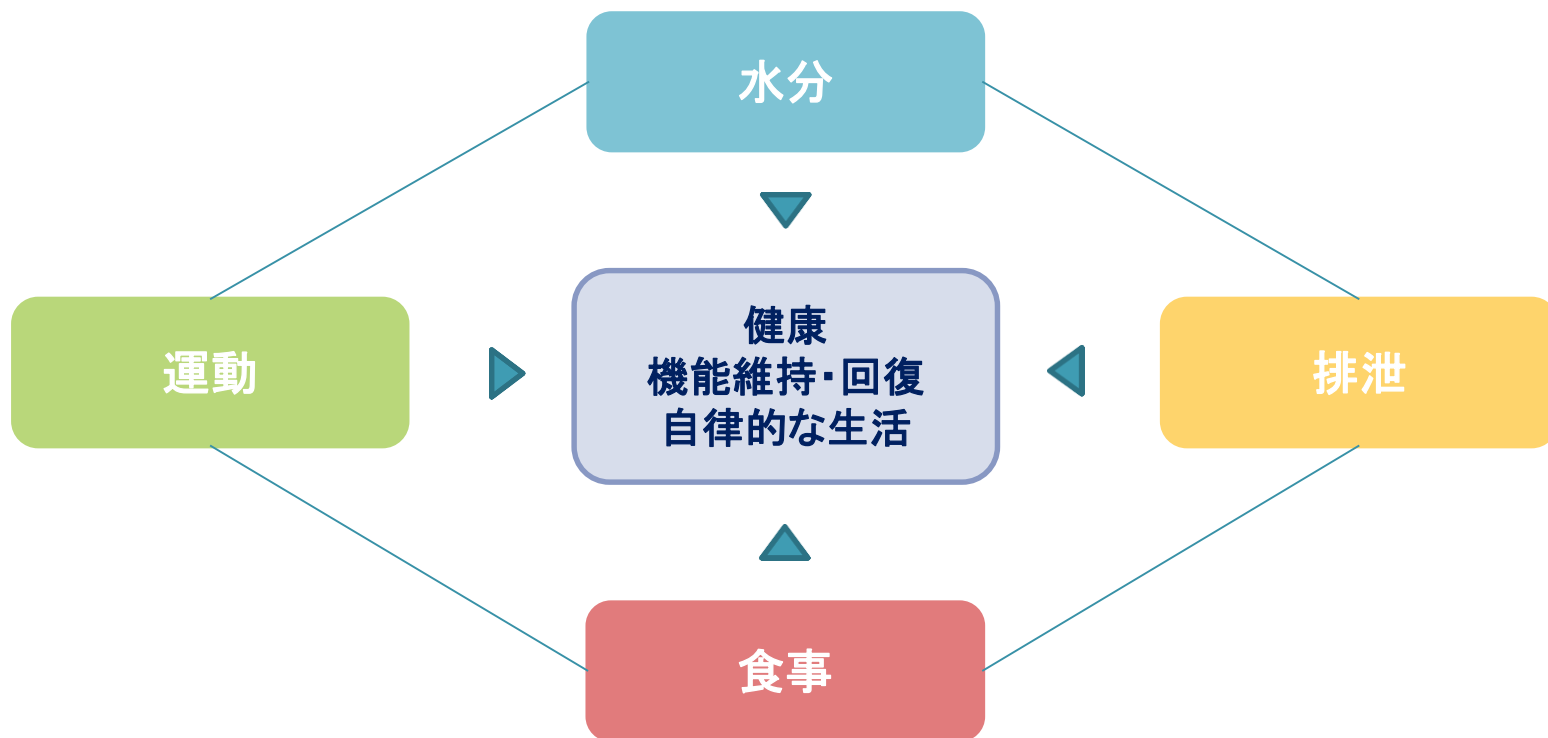
- ・社会的ニーズに応じた事業計画の作成
- ・社会資源の開発

(3) 第三者評価の受審

- ・自施設の振り返りと業務改善
- ・受審結果の公表による経営の透明化

科学的介護の実践① ～4つの基本的ケアへの取り組み～

以下の4つの要素への適切なケアを通じて、いきいきと健康的な生活を営んでいただきます。



【水分】

- ・1日1500ml以上を目標
- ・利用者様に合わせた水分摂取

「水分」は人間の身体に与える生理的影響がとても大きく、不足すると意識障害・発熱などの症状が現れ、10%の不足で死に至ります。

1日の体内の水分の出入りから考え、1日1500ml(食事の中に含まれる水分量を含む)の水分を摂取することが必要です。

しっかりと水分を摂取することで身体の不調の多くが解消されます。また、日中にしっかりと水分を摂って運動することで覚醒水準(意識レベル)が上がり、夜間の安眠や自然な排便につながります。

【食事】

- ・1日1500kcalの栄養摂取
- ・常食を目指して「噛む」「飲み込む」といった本人の意思を引き出す

食事には「栄養源としての食事」と「楽しみとしての食事」という2つの役割があります。普通の食事(常食)は、栄養値も高く、食物繊維があり、誤嚥予防などの観点からも安全です。口腔内清潔の面でも常食が最適です。

見た目や匂いも食事を楽しむためには大きな要素であり、自分の口でしっかりと「噛む」「飲み込む」ことで食べることの喜びを取り戻すことができます。

また、食物をよく噛んで食べることで咀嚼機能を維持すると同時に、脳の神経を刺激し、脳を活性化することができます。

胃ろうなどでしばらく噛むことをされていなかった方も、するめや昆布などで咀嚼トレーニングをして口から食事が食べれるよう、段階的に常食に近づけていきます。

【運動】

- ・無理のない運動(歩く)で機能維持・向上を図る
- ・車椅子→つかまり立ち→歩行器→シルバーカー→杖歩行を目指して！

歩けなくなるのは、下肢筋力の低下だけではなく歩き方を忘れることも要因の一つです(学習理論)。

「歩行」は、運動の基礎でもあり、自立に向けたすべての活動の起点となります。歩行が安定することで食事・入浴・トイレといった日常生活動作は自然と自立していきます。

【排泄】

- ・定期的・規則的な排泄ケアにより体に自然なリズムを作る
- ・下剤に頼らない自然排便を目指す

日中はオムツやパットを使うことなく、トイレに座って排便・排尿をすませていただくためのケアに取り組む。

十分な水分を補給し、“尿意”を取り戻し、それを「抑制」するための認知機能の回復を図ることで尿失禁の改善につながります。また、食事をよく噛んで食べる。運動を習慣にする。このことによって体に自然なリズムが生まれます。

排便をサポートするためにバランスのよい食事を提供し、腸内フローラを整えます。

科学的介護の実践②－1 ～5つのゼロと4つの自律支援～

1. 5つのゼロ

- ①日中おむつゼロ
- ②転倒ゼロ
- ③褥瘡(床ずれ)ゼロ
- ④身体拘束ゼロ
- ⑤胃ろうゼロ

①日中おむつゼロ

- 人としての尊厳を支える排泄ケアを実践する
- 水分ケア・食事改善・歩行練習で、日中おむつゼロを目指す

- ・1日1,500mlの水分摂取を目安にし、その人の生活リズムをつくり、夜間不眠の解消に努めます。
- ・バランスのいい食事を美味しく食べ、楽しく運動、しっかり水分、薬に頼らず、トイレでの「自然な排泄」を促します。

何故おむつゼロなのか？

ベット上で寝たままでおむつ交換をされる……。あなたがその立場ならどのような思いを抱くでしょうか？ご利用者にとっておむつ交換ほど羞恥心を見られ不快な思いをすることはないかもしれませんね。

座位ができるようになることで、便座に座ることができるようになり、起き上がる事で腹圧がかかり便が出やすくなり、トイレでの排便が習慣化され排便ができるようになるという自然なリズムができてきます。

トイレで排便をすることの気持ち良さを取り戻していただくことができ、同時に、職員の介護負担が軽減され、空いた時間をご利用者とふれあう時間にあてることができます。

②転倒ゼロ～骨折防止へのリスクマネジメント～

- 環境整備と転倒因子を排除する
- 日々の心と体の変化を敏感に察知し、常に安全を心がける
- 事故・ヒヤリはっとの分析と、適切なアセスメントによる転倒予防

骨折は高齢者が寝たきりとなる原因の一つです。

事故防止員会を中心として、同様の事故の再発防止、安全に配慮した環境の設定、事例検討の習慣化、職員間での意識の均一化など、事故を未然に防止するための取り組みを行います。

安全を優先しすぎてご利用者の行動を制限してしまわないよう、ご利用者の自律的な生活にも配慮しながら取り組んでいきます。

③褥瘡(床ずれ)ゼロ

- 苦痛及び重大な感染症を引き起こす原因となる褥瘡の排除
- 多職種による連携で、褥瘡予防に努める

- ・チェックシートの活用(状態把握と気づき、早期発見)
- ・写真による経過報告
- ・職員研修会議での褥瘡報告・情報の共有
- ・視覚化による対応方法の標準化
- ・栄養補給
- ・スキンケア
- ・体圧分散
- ・離床の促し

④身体拘束ゼロ

■ 科学的認知症ケアの確立

- ・高齢者の尊厳を損う拘束は行いません。拘束に結びつかない科学的で適切なケアを実践します。
- ・不適切なケアが拘束・虐待の始まり。運営適正化委員会を中心に日常のケアについて振り返りと改善を行います。
- ・認知症による徘徊防止のための離床センサーの使用はしません。

⑤胃ろうゼロ

■口腔機能の正しい理解に基づく介護

- ・「口から食べる」ことにより、生命活動の維持だけでなく、生きがいや喜びを取り戻し、生活の質を向上させます。食事介助の基本「椅子に腰掛け、床に足をつけ、よりよい姿勢で食べる」「噛んで美味しく、最期まで楽しい食事」を目指します。
- ・胃ろう外しは水分補給から。
水分摂取の目安を1日1,500ml（流動食含む）とします。
- ・口腔機能を正しく理解し、口腔ケアを実践します。

科学的介護の実践②－2 ～5つのゼロと4つの自律支援～

2. 4つの自律支援

- ①認知症ケア
- ②リハビリテーション
- ③口腔ケア
- ④看取りケア

① 認知症ケア

■ 原因疾患別の特徴を踏まえたケアを行う

- ・認知症は、早期発見、早期治療が大切です。症状の進行を遅らせることで、本人や介護者の負担を軽減することができます。
- ・介護職が医学的知識を持ち、認知症の前駆段階での早期発見と早期介入ができる力を身につけます。
- ・ケア計画は、BPSD、原因疾患別、薬剤、その他の環境要因などを考慮して、定期的かつ適切な見直しを行います。

② リハビリテーション

■ 生活リハビリを中心とした機能訓練を実施する

■ 廃用症候群対策の徹底

- ・最も効果的な高齢者のリハビリは、日々の生活動作の中にあります。
- ・リハビリテーションは脳の動きを活性化することであり、離床はリハビリの第一歩です。離床を促し、能動的な生活により、褥瘡、関節拘縮、骨萎縮、臓器機能低下・意識レベル低下などの廃用症候群を防ぎます。

③口腔ケア

■ 歯科専門職と介護職との連携・協働で口腔機能の維持

- ・口腔機能の維持・向上で、誤嚥性肺炎、口腔疾患を予防します。ADLの改善やQOLの向上に大きく寄与します。
- ・常食化に向けた取り組みで、最期まで口から食べることを、美味しく楽しく食べることを支援します。安易な食事形態の変更はしません。

④看取りケア

■ 安らかなラストステージを支援

- ・常に、「尊厳を守る」という観点に立ち、最期の瞬間まで安らかな気持ちで生きることができるよう支援します。看取りケアを特別なケアとして捉えるのではなく、日常的ケアの延長上で、安らかなラストステージを支援します。
- ・人間としての尊厳に対するホスピタリティあふれるケアを通して、専門職としてだけでなく全人的な成長を図ります。